

【原著】

国語科教育法の授業改善

岡 利 道

Improving Japanese Language and Literature Teaching Methodology

Toshimichi Oka

1. 研究の目的と方法

筆者が担当する国語科教育法（初等教育学科2年生受講）が、2017年度前期広島文教女子大学高等教育研究センターFD部会主催による「授業評価に基づく公開授業」の一つとなった。そして、7月7日（金）3コマの同授業の第10回を、11名の教員にご覧いただくことができた。筆者はこの機会を捉え、教員個人で取り組むFD研究のあるべき姿について研究的な提案をしようと考えた。その意味で、国語科教育法の授業改善を本論文のタイトルとしているが、もしサブ・タイトルをつけるならば、教員個人で取り組むFD研究のあるべき姿を考える、というものになる。勿論、FD研究は、毎年広島文教女子大学が組織を挙げて取り組んでいるわけであるが、日常的な個人レベルの同様な研究も欠かせないと思うが故に、この度の着眼にいたったのである。

この機会を生かし、FD研究にあたっての視点とできるのは、以下の項目となると考えた。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1. 授業設計（コース・デザインとクラス・デザイン）という視点2. 三ポリシー（特にディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー）との関連という視点3. メディアの活用（板書・掲示物等のオールド・メディアとパソコン・同端末等のニュー・メディアとの相乗効果）という視点4. 学修成果の評価を検討するという視点5. 学生の自己評価（授業後の学習アンケート）を生かすという視点6. 当日（7/7）の参観者の評価・コメントを生かすという視点 |
|---|

資料 筆者が構想するFD研究にあたっての視点

先行研究として、佐藤（2010）の研究の、とりわけ「授業を振り返る意義」の部分挙げたい。そこでは、振り返ることの意義として、次の三点が示されている。

- ・振り返りにより、次回の授業の不十分なところを補う。
- ・振り返りにより、学生とのコミュニケーションを促進し、参加意識を高める。
- ・振り返りにより、授業全体をデザインし直すための反省材料を得る。

そして、振り返りの方法としては、ビデオ録画による自己分析、同僚教員による授業参観と検討会、コンサルタントによる分析、学生からの評価（アンケート・小テスト・質問紙）が推奨されている。この度の研究においては、コンサルタントによるものを除き、ほぼ全体的に上記の考えを踏襲し、検討していくことができると考える。それをもとに、上記枠内の項目で、筆者オリジナルなものとして、2・6を加えた。

また、池田ら（2001）では、「魅力ある授業を演出する」という方法について具体策を提示しており、例えば、以下のような項目が挙げられている。

〈授業前のこととして〉

今日の授業をイメージする・授業直前のリラクゼーションとウォーミングアップ

〈授業中のこととして〉

俳優としての教師（テンポと強弱を組み合わせよう・ボディランゲージを活用しよう・できるだけマイクに頼らない・学生に顔を向ける・ポイントを多様な方法で表現する・自分なりの講義口調を編み出そう）

授業の大道具・小道具（メディア機器に気をつけろ・黒板とハンドアウトを見直そう・助けを借りる→ゲストスピーカーやティーチングアシスタント）

これらは、私たちが日々の授業を振り返る上で、大切な視点を与えていると考える。本研究では、できるだけそれらの視点を借りることにする。ただし、上記の内容のうち、ゲストスピーカーやティーチングアシスタントの助けを借りるということについては、即座に導入することが叶わないために、除いたことをおことわりしておきたい。

従って、本研究の目的を、国語科教育法の授業実践を対象とし、上記6項目をFD研究の視点としながら、教育個人で取り組むFD研究のあるべき姿を考察する、ということにしたい。

また、研究の方法としては、研究対象が授業実践であるだけに、事例研究法の形を取るが、上記6項目の研究の視点を基に、自己評価及び他者評価を取り入れ、その精度を高めるようにしていく。

2. 授業設計（コース・デザインとクラス・デザイン）という視点から

シラバスには、コース（基本的に15コマ分の授業群）全体の構成や、クラス（基本的に1回分の授業）の要諦などが、それぞれにふさわしい情報の形で詰め込まれている。インストラクショナル・デザインでもあるシラバスの充実は、私たち教員に課せられた重要な使命の内の一つである。

この度の授業公開では、本科目のコース・デザインを踏まえ、第10回にあたるどころのクラス・デザインをより精密にして臨んだつもりである。

ここで、第10回の授業内容を示しておくことにする。筆者作成によるテキストの当該部分と、授業後の板書記録を掲げ、授業内容の紹介としたい。

〈筆者補足：学生への配付時には、縦書きのスタイルになっている。〉

第10回 漢字指導は国語科指導の「いろは」の「い」

キーワード … 漢字学年配当表、筆順、部首、とめ・はね・はらいなど、漢字ドリル、漢字練習帳

予習のポイント

漢字などの文字を確実に習得させることについて、あなたが感じてきた授業での問題点や家庭学習（宿題）の在り方など、考えをまとめておく。

一 教育漢字は セン・ロック だ！

小学校六年間で学ぶことになっている漢字は一〇〇六字。各学年で学習すべき「配当漢字」で、読む

ことはその学年で、書くことは次の学年までに習得することになっている。

さて、セン・ロック、つまり一〇〇六文字も教えるのは大変だろうか。一年間の授業日数は約二〇〇日だ。六年間では一二〇〇日。一日一文字指導したとして、六年間ならば…、そう、全て教えることができる計算に。

二 現行の国語教科書で、漢字学習の単元を見てみよう

では、小学生たちは、国語教科書でどのように漢字を学習するのだろうか。講義者が電子教科書で示すので、気づいたことをメモしておこう。

〈メモ〉

三 漢字ドリル・漢字練習帳も重要アイテム

受講生の皆さんも、漢字ドリル・漢字練習帳に随分お世話になってきたことだろう。

漢字ドリルは、カラフルだし、イラストや豆知識も載せてあり、それはそれでいいとしても、あの味気ない漢字練習帳の存在は…。宿題で、新しい漢字を十回あるいは一行のマス全部に書いてくること、などと言われたことがあるだろう。それで身についたのだろうか？

いやいや。苦痛だけしか残らなかった可能性も…。無意味な繰り返し練習からの脱却を図らねばならない。繰り返し練習がいけないと言っているのではない。意味のある反復練習ならば、確実に身につくのである。

漢字を書く学習とは、読み方、意味、なりたちや字の形、文章中での使われ方を知ると、俄然記憶に残るものだ。そのためにも、教科書の漢字単元でしっかり教え、漢字ドリルをこまめに使わせていく指導をしたい。

また、宿題で漢字練習をさせたならば、提出された漢字練習帳にしっかりと目を通し、花丸をつけてあげたり、褒め言葉やアドバイスを書いてあげたりして、ぬくもりのある評価をしてあげよう。

四 美しい字を書かせる、でいいのだろうか？

漢字指導の基本として、①筆順、②部首、③とめ・はね・はらいを挙げることができる。

はやく、効率的にということ求められる世の中だが、じっくり、丁寧に組み立てることが肝要である。つまり、美しく、綺麗に書く、ということではないのである。丁寧に書く、が合言葉である。

筆順は、整った字を書くためのコツ。それを覚え、それに従って書かせる。部首の確認も忘れない。それは、あとになって役に立つ。「さんずい」の漢字を集めてみたら、そう、水に関連したものばかりだと子どもは気づくはずだ。とめ・はね・はらいに気をつけさせる。線の長い・短いを間違えないようにさせる。そうすることで、子どもたちは新しい漢字を受け入れていくのである。そうやってこそ、練習学習に向かってくれるはずである。

ちなみに、宿題では、漢字ドリルの「1ページ程度がよい」とベテラン教師たちは言っているようである。

五 色々な技術や知識を持つ

子どもが漢字を読み書きできるようになるためには、学習方法や、活用のさせ方の指導技術が必要となる。

例えば、「空書」→「そらがき」を覚えよう。空書とは、腕・手・指を使って、大きな動作で空中に文字を書くことだ。

筆順は、先にも触れたように、昔、筆で漢字を美しく書く際の効率的運筆法としてできたもの（右利き用）。その筆順を、教科書や漢字ドリルの解説だけでなく、教師によるダイナミックなパフォーマンスとしての空書で伝えようではないか。

部首を確認する学習。これは、とすれば機械的な説明に終わり、効果を上げない場合がある。覚えているようで覚えていないのが漢字の部首。興味をくすぐる指導とは…。一例を挙げよう。単発でやっている、それこそ味気ない。そこで、かたためて、つまりグルーピングして教えることを提案する。次

の漢字を見てもらいたい。

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十。

さあ、受講生の皆さん、全部の部首を言えるだろうか。最初の一つ、二つは教えてあげ、あとは子どもに推測させる。子どもは必死になって考えること請け合い！（答は、復習のポイントの後ろに。）

さあ、自信をなくしてはいけない！ 疑問に思ったら、すぐその場で調べよう。まさに、「イマ」が大事。その、「マメ」さが、差のつく指導技術を生むのである。

復習のポイント

本講のポイントをまとめる。→ノート整理・発展学習

例えば、次の事柄など、まとめておくとよいだろう。

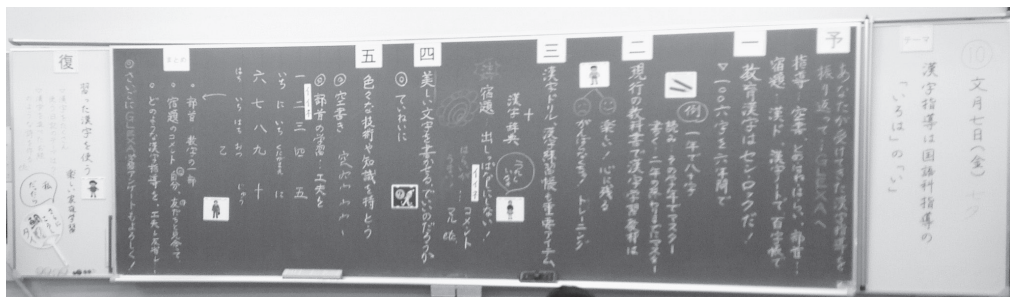
参考にしてほしい。

▽漢字を使いたくなる「日記」のテーマはないだろうか。お坊さんが唱える「お経」を習った漢字を無作為に並べて作ってみさせる。「ミニ漢詩」に挑戦してみさせる…。皆さんも色々とアイデアを出し、指導計画を作成してみるとよいだろう。

部首クイズの解答

- | | |
|------------------------|------------|
| 一 … いち | 二 … に |
| 三 … いち | 四 … くにながまえ |
| 五 … に | |
| 六 … はち（または、はちがしら） | |
| 七 … いち | |
| 八 … はち | |
| 九 … おつ（または、おつによろ、つりばり） | |
| 十 … じゅう | |

資料 第10回のテキスト内容



資料 講義当日の板書記録

3. 三ポリシー（特にディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシー）との関連

関係するポリシーを、以下に引用する。勿論、初等教育学科のものである。下線は筆者による。

<p style="text-align: center;">卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）</p> <p>状況を見極め適切に判断し、計画を具体的な行動に移す能力（実践力） 自らの目標達成のために解決しなければならない課題に対して、状況に対する正しい理解とそれに基づく最適な判断、そして積極的な態度で行動することができます。</p> <p>自らを律し、社会でたくましく生き抜こうとする姿勢（自律性） 予測困難な社会の中で、たくましく生き抜いてゆこうとする姿勢を身につけることができます。</p> <p>リテラシーに基づくコミュニケーション力 言語に関わる高度なリテラシーを獲得し、それに基づくコミュニケーション能力を実践的生活に活用することができます。</p> <p>専門的な知識・技能の活用力 <u>教職、教科教育及び保育等の、教育学に関わる専門的な知識・技能を獲得し、それを職業生活において活用することができます。</u></p> <p>豊かな人間性（育心 育人） 「育心育人」の精神に基づく他者への配慮、多様性への理解、自らの人間性の向上を通して人間性あふれる豊かな社会を実現しようとする態度を身につけることができます。</p> <p style="text-align: center;">教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）</p> <p>1 学修内容</p> <p>(1) 教養教育では、現実の問題を多面的に考える力や社会で必要となる基礎的なスキルとともに、たくましく生きる力を身につけることを目的として初年次教育及びキャリア形成教育をおこないます。</p> <p>(2) 語学教育では、英語学修専用施設（Bunkyo English Communication Center）を活用した少人数教育によるアクティブ・ラーニングを通して外国語の活用力の育成をはかります。</p> <p>(3) 専門教育では、教育学の体系性に基づいて、科目を適切な学年・期に配置し、その関連性をカリキュラムマップによって示します。</p> <p>2 学修方法</p> <p>(1) 双方向性を実現し、能動的な学修態度と実践力を養うために ICT 機器を活用します。</p> <p>(2) 自律学修習慣を身につけるために、「育心の時間」（オフィスパワー）を活用して学修成果評価後の指導を実施します。</p> <p>(3) 実践力及びコミュニケーション力を養うために、少人数の授業ではアクティブ・ラーニングを取り入れます。</p> <p>(4) 初等教育学科では教育者として求められる豊かな人間性を育成するために、「プログラム育心」を実施します。</p> <p>3 学修成果の評価の在り方</p> <p>学科全体に関わる評価は学科長によって、学年別の評価はチューターによって、専門教育科目の GPA に基づいて評価します。</p>

資料 広島文教女子大学初等教育学科におけるディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシー

第一の「ディプロマ・ポリシー」のうち、五つ全てを、本科目においても意識して授業するようにしていった。とりわけ、四つ目の「専門的な知識・技能の活用力」を重視することは言うまでもない。国語科教育の実践力をつけるために、2年次においてはその基礎をしっかりと身につけさせるよう心掛ける。それが、3年次においての応用・発展的な力に繋がっていくこ

とになる。

第二の「カリキュラム・ポリシー」では、2-(1)と2-(3)を押さえないといけない。その(1)については、次の「4」で触れることになるメディアの活用を図りつつ、有益かつ興味深い情報を手掛かりとして、能動的な取り組みとなるよう工夫をしているところである。同様の(3)については、本科目の受講者が30名程度であることから、何とかその方法を取り入れることができていると捉えている。

4. メディアの活用（板書・掲示物等のオールド・メディアとパソコン・同端末等のニュー・メディアとの相乗効果）という視点

今年の8月24日に開かれた高等教育研究センター主催のFD・SD研修会では、本科目の参観授業時の様子をVTRでご覧いただいた。

VTRのキャプション部分を挙げておくことにする。授業の節目となるところを示すことであり、メディア利用の流れをつかんでいただけると考えるからである。

「教員個人で取り組むFD研究のあるべき姿を考える」→「日付やテーマ等は、事前に板書しておく。本時のテーマの確認をした。テーマ：漢字指導は国語科指導の「いろは」の「い」→「Webブラウザで利用できる学習システムの出席確認で、出欠管理システムとのダブルチェックをする。ICTの利用①」→「学習アンケートへの協力を呼びかける。」→「Webブラウザで利用できる学習システムの教材で、「漢字指導の思い出」「同 宿題の様子」をアンケート。ICTの利用②」→「アンケートへの回答として、空書（そらがき）や、漢字ノートに何回も書いた等の声が寄せられた。」→「本時の学習事項1番を終え、同2番の現行国語教科書の漢字単元を見てみように移る。また、スクリーンに電子教科書を映し、T社の同教材例を見てもらう。ICTの利用③」→「学生が配付された教科書で見つけた漢字単元の例を、パソコン端末で紹介。ICTの利用④」なお、ビデオクリップでは後で出てこないが、Webブラウザで利用できる学習システムの教材で、学習アンケートを後ほどしている→ICTの利用⑤」→「学習事項3番の漢字学習のツールを終え、同4番の丁寧さを大事にする指導、そして5番の色々な知識・技術を持つことへと進む。」→「部首クイズに取り組ませた後、答え合わせをした。本時の復習（課外）として、学習を振り返るとともに、発展として「習った漢字を使う楽しい漢字学習を構想する」ことを提示。」→「学生に本時の取り組みを振り返らせ、「イイネ」マークをつけて、その理由を発表してもらう（都合3名）。それを基に、授業者がまとめをした。」→「最終の板書である。（筆者補足）小学校の通常の国語科授業の場合、授業内容を黒板一枚に収まるようにするため、それに合わせるようにしているところである。」

自身としては、それらのバランスを考えてしたつもりである。参観していただいた先生方のご意見に耳を傾けねばと思う。それに関しては、後掲の「7」において、まとめることにする。

5. 学修成果の評価を検討するという視点

正直なところ、この部分が筆者にとって最も課題となる点だと感じている。本授業では、最終的な成果（物）として、学習指導案の作成・提出を課している。8月24日の研修会では現物をご覧いただいたが、ここでは割愛させていただく。模擬授業をすることについては、シラバスでは明確に謳っていなかった。もしするならばパフォーマンス評価がふさわしく、専用の評価ルーブリックを使用することになる。本年度はなし得なかったが、次年度は取り入れるべく、

検討したいと考えている。

小規模な形では、取り入れている。過去において、本格的に取り入れた年度もあったが、他の内容が犠牲になったところがあり、本年度にいたっている。時間的な余裕のないことが、最もネックとなっている。実際、国語科の教育法の場合、他教科より内容学的な面でも方法的な面でも分量がかなり多く、この状態で、講義内容のどこを削り、模擬授業に回すのか。これは、講義者にとって、かなり難しい問題である。さらに検討を重ねる必要がある。

6. 学生の自己評価（授業後の学習アンケート）を生かすという視点

まず、アンケート項目を示す。

I	講義内容は分かりやすかったですか。 → a とてもわかりやすかった／b まあまあわかりやすかった／ c ややわかりにくかった／d とてもわかりにくかった
II	講義を、問題意識を持って聞けましたか。 → a かなりできた／b まあまあできた／c ややできなかった／d かなりできなかった
III	次の例を読んで答えて下さい。 おーっ、これはすごいな or 面白いな→具体的には、子どもへはこう指導することではないか。 うーん、これは問題だな or 難しいな→教師として、こうクリアすべきではないか。 このような箇所を複数、ノートテイキングできましたか。…インタレスト → ab できた／cd できなかった
IV	先の内容の続きです。 例えば上の②のような自身のアイデアが複数、ノートに書き込みましたか。 …インスピレーション → ab できた／cd できなかった

資料 学生による授業評価アンケート項目（国語科教育法においてのみ利用）

ここでは、はじめの頃の結果として第2回の結果と、コース後半に入ってから、この度の第10回の結果を表にして示すことにしたい。

〈第2回〉全30名中23名回答

問い／回答	a	b	c	d
I	18	5	0	0
II	13	9	0	0
III	21		2	
IV	18		5	

〈第10回〉全30名中26名回答

問い／回答	a	b	c	d
I	23	3	0	0
II	16	10	0	0
III	23		3	
IV	24		2	

表 アンケート結果

サンプル数が少ないので、信頼度の面では問題もあるが、それぞれの問いにおいて若干のプラス要素は掴むことができる。特筆できるのは、学生自身の振り返りとして、ⅢとⅣの問いであるが、ノート・テイキングに向かう意欲が向上している結果が見られたことである。わずかではあるが。指導者としては、このような傾向が見られることが、最も嬉しいことである。

7. 当日 (7/7) の参観者の評価・コメントを生かすという視点

せっかくの機会をいただいたので、ここの部分に、いちばん力を入れたいと考えた。

事前申し込みでは、12名の先生方が参観されることとなっていた。当日は1名ご欠席で、11名の先生方がいらっしやった。また最終的に、アンケートをお出しいただいた先生方は7名であった。

以下、その項目と結果、そして筆者の簡単なコメントを挙げていく。

■参考になった項目に○をつけてください。※複数回答可

1. 教材を工夫したり、学生の考えや疑問などを授業に反映させたりするなど、学生の理解度や授業態度に配慮している点

→ ○ 7名

【筆者】 過分な評価で恐縮している。より一層励まねばと思う。

2. パソコン端末などを利用したり、グループ学習などで学生の意見の発表やディスカッションを実施したりするなど、学生が授業に積極的に参加できるように配慮している点

→ ○ 6名

【筆者】 自己評価では、討論→対立的な意見のやりとりの面で十分ではなかったと反省している。

3. その他、参考になった点をお書きください。

- webブラウザで利用できる学習システムの活用法、板書、話す速さ・話し方・声のかけ方。

【筆者】 自己評価では、特に話し方の面で反省点が残った。年齢のせいかわ舌が悪く、表情の面でも気をつけねばと感じる。VTRを見ると如実にわかるのである。

- 板書が体系的に整理されて書かれており良かった。起立した挨拶で始まりと終わりを行っていたのは、良かった。

【筆者】 自己評価では、討論→対立的な意見のやりとりの面で十分ではなかったと反省している。

- 板書がとてもきれいで、1枚におさまっており、最後にはぴったり1枚で完成した点は一番参考になった。グループワークや発表が授業の中に無駄なく位置づいており見習いたいと思った。

【筆者】 板書は、いちばん気をつかったところと言える。分量的に少ないのではという別の視点も持ちつつ、本当に伝えなければならないのは何かということを熟慮していきたい。

- 受講生一人一人とコミュニケーションをとりながらの授業進行。机間指導が丁寧になされていた。小学校教師としての模範的あり方を示そうと意図されていると拝察した。

【筆者】 机間指導まで細かく見てもらい、ありがたく思う。特に個人での活動やグループワークの時に、しっかりと意図的・計画的に指導せねばとの反省点が出てきた。

- 小学校教員の経験があり、かつ小学校教員養成の授業とはいえ、小学校の授業の手法を

大学生に活用出来るということに、積極的な意味で感服している。

【筆者】コメントをありがたく思うと同時に、高等教育として質的にどうかと、常に内容面・運営面をチェックして毎時間に組みまねばと、今後の課題が見えてきた。

■その他、お気づきになられたことがあれば、お書きください。

○大学生が、小学生のように意欲的に学ぶ姿が見られ、感激した。

【筆者】確かに大学生を小学生のように扱っているのではと、瞬間的にはっとする場面がある。学生一人一人の個人としての尊厳を考え、接し方を常に考えなければと思う。

○受講生が積極的に授業参加できるよう、発問や指示を出していた。

【筆者】板書計画をしっかりと立てるように意識し始めてから、発問のプレがなくなったと認識している。半面、その計画に、是が非でも学生の考えを押し込めないよう格段の注意がいると考える。

○プリント資料、実際の教科書、本学が導入している Web ブラウザで利用できる学習システム、バズ・セッション、板書等、様々な方面から授業が立体化されていることが良くわかった。学生たちが飽きないように仕掛けられていた。

【筆者】ずっと座らされている学生の思いを、つつい忘れて、尊大にならないよう、今後も気持ちを引き締めねばと感じた。

■公開授業の運営の面で、ご意見・ご希望があれば、お書きください。

(この部分については、割愛させていただく。)

8. 考察・まとめ

国語科教育法の授業実践を対象とし、前掲6項目をFD研究の視点としながら、教育個人で取り組むFD研究のあるべき姿を考察するということを本研究の目的とした。今最も心に浮かぶのは、一教員としての筆者自身に突き刺さるように感じるどころの、「自己本位になってはいけない」・「ステレオ・タイプになってはいけない」という自戒の言葉である。

例えば、コース・デザインにしてもクラス・デザインにしても、自らの実践知・経験知に重きをおいてしまいがちな点。授業をしている時、いわゆる長幼の序を盾に学生を自説で押さえつけようとしがちな点。時間がないからと勝手に理由をつけて、「双方向性を実現し、能動的な学修態度と実践力を養うためにICT機器を活用」するなどの学修方法研究を止めてしまいがちな点。葛藤に次ぐ葛藤である。こうした葛藤に打ち克とうとする時、真に develop（発達させる、発展させる）の営みとなるのだろう、と感じているところである。

最後に、「教員個人で取り組むFD研究のあるべき姿を考える」という観点からは、次のことを結論づけることができる。この度のFD研究にあたって視点とした6項目を、継続し、経年変化をさらに捉えていくならば、取り組むその本人の指導技能は決して後退しないだろう、ということである。

9. 今後の課題

ここでは、筆者自身の今後に向けての課題として、まずは短期的なものから列举していく。

ア. 学内 LAN の講義資料の充実

イ. テキストの充実

ウ. パケットの充実

エ. 本学が導入している Web ブラウザで利用できる学習システム上の教材の充実

上記「エ」に関して補足すると、教材の充実という面については、小テストの開発により精力を注ぎ、また映像教材をもっと作成し、活用したいと考えている。特に SD の面での協力が得られたらありがたいと思う。

中期的なものとしては、計画的・継続的にサイクル化するものとなるだろうが、次のものを挙げておく。

オ. コースデザインとクラスデザインの PDCA → 教員の指導力向上のサイクル化

(具体的なものとしては、アクティブ・ラーニングのデザインや、ティーチング・コーチング・トレーニング・カウンセリングのデザインについて)

カ. 学修成果物のレベル・アップ

(段階的に積み上がっていくものに・学生の真の力となるようにデザインしていく)

基盤的な研究として進めていかねばならないこともある。次の 2 点である。

キ. 学力評価研究…学生の資質・能力（コンピテンシー）をどう伸ばすかということを確認にし、三ポリシーが有機的に繋がることを考慮する必要がある。評価の具体論としては、アセスメント・ポリシーの実質化、評価ルーブリックの開発・改善、真正な評価として学生にどのように返すかがポイントであると考ええる。

ク. 教材開発研究…やはり面白い授業となるようにしていきたい。ただし高等教育としての質を保證することが条件である。

謝 辞

まずもって、アンケートを提出いただいた教職員各位に心より御礼申し上げる。もしそれがなければ本研究の質・精度が大いに下がるであろうということは、想像に難くない。なお、同教職員各位には、事前に本論文で取り上げることにについて、厳密な意味でご了解を得ていなかったもので、心よりお詫び申し上げるとともに、個人が特定されないように、筆者なりに十分に注意を払い、同時に文章表現を若干改めさせていただいたことをおことわりしておきたい。

また、当該授業の受講生のみなさんにも、授業前に本研究の主旨を理解してもらい、協力してもらったからこそ、ここまでたどり着くことができた。感謝の気持ちでいっぱいである。

そして、このような機会を与えていただかなければ本研究は成立しなかったことから、広島文教女子大学高等教育研究センター及び同 FD 部会の教職員各位に対しても、衷心より御礼申し上げます次第である。

参 考 文 献

- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹. 2001. 成長するティップス先生—授業デザインのための秘訣集 (高等教育シリーズ104). 玉川大学出版部.
- 佐藤浩章. 2010. 大学教員のための授業方法とデザイン. 玉川大学出版部.

—平成29年9月25日 受理—